

シネマ日記



No. 75

○月×日 心を病んでいる二人。元高校教師の男（フレッドリー・クーパー）は妻の浮気相手を殴り、精神もおかしくなり入院、あげくに妻も家も職も失った退院して社会復帰を目指しているのだが、そんなとき夫を亡くしたばかりの女（ジェニファー・ローレンス）に出会う。女は夫の死を忘れるため、会社中の男と寝てクビになったイカレぶり。そんな女だから、出会ったばかりで男をベッドに誘う。「世界にひとつのプレイブック」（デヴィッド・ラッセル監督）は、躁と鬱の感情の起伏の激しい二人がハラハラドキドキの危なげな行動をしていく筋立てに、その狂気ぶりが笑いを誘

う。だが、人生のどん底から立ち直ろうとする二人の明るい狂気とでもいうのか、観客はいつしか彼らのやり直し人生を応援しながら、結末を迎えることになる。男の父親役のロバート・デ・ニーロが少々おかしなノミ屋として登場する。また、まだ若いジェニファーの演技の達者ぶりも見所である。

○月×日 「堀の中のジュリアス・シーザー」（タヴェイアーニ兄弟）は本物の刑務所で実際の服役囚が演じる風変わりな映画である。ローマ郊外のある刑務所では演劇実習が行われ、毎年さまざまな戯曲を囚人たちが演じ、所内の劇場で一般観客に披露しているのだ。この年はシェイクスピアの「ジュリアス・シーザー」が取り上げられた。芝居は、ご存じ「ブルータス、お前もか」で有名な、独裁者シーザーを倒す話。だが、ブルータスは謀反人として破滅に追い込まれる囚人たちは終身刑もいる重罪人たち。カメラは二重扉の中に入り込み、彼らの役作りの様を追っていく。殺

人や騙し合い、裏切りの内容を演じるわけで、彼らそのものがそうした苦悩を心に秘めた当事者であるから練習の最中にも自らの葛藤がほとぼしるほどにリアルである。ブルータスの謀反劇が単なる芝居ではなく、現実の白昼劇として蘇ったかの錯覚すら覚えた。囚人たちの中には実際、出所後に俳優になった者もいる。昨年のベルリン映画祭でグランプリを受賞した。

○月×日 学生時代を振り返るとき、不器用でお調子者で、困った奴だったが、なぜか憎めない、そんな楽しい友達がいたことを思い出す。いや、当の自分がそうだったのかもしれない。「横道世之介」（沖田修一監督）は、ベストセラー小説「悪人」の吉田修一の同名小説の映画化。80年代、主人公の世之助が長崎から上京し、偶然入った「サンバ」踊りのサークルを通じて、友達とつるんだり、恋をしたりの大学1年間を描いた青春ストーリーだ。16年後の彼らの姿を時たま織り込むことで、夢や希望に溢れていたあの時を浮かび

上からせる演出がまた、人生のほろ苦さも伝える。高良健吾、吉高由里子の青春スターが楽しく演じている。○月×日 バツイチで年頃の娘と暮らしている50代の男（佐藤浩市）が独り身の女（吉瀬美智子）にふと思いが行く。そして取引先の男（西村雅彦）に親友になつてくれと懇願される。いい年になって、三人が三様に寂しくなってきたのだ。そんなとき、半ば無理やり親に見離された幼子の面倒を見ることになってしまう。深く傷ついた少年を癒したいと、途方にくれて4人は異国への旅を決意する。行き先は世界最後の桃源郷とされているファンザ地方だ。美しい山々に囲まれた「草原の椅子」（成島出監督）に座ったとき、もう一度生きていく決意が生まれてくるのだった…。

○月×日 「96時間 リベンジ」（オリヴィエ・メガトン監督）。娯楽活劇を見てスカツとするのもいい。迷宮の街イスタンブール。元秘密工作員（リーアム・ニーソン）は殺し屋から家族を守るか…。（内藤哲